

青倉さんのお水（朝来町）

むかし、青倉山のふもと、伊由谷在（いゆだにざい）に、ひとりの老爺（ろうや）と息子が住んでいました。息子は田畑で終日（しゅうじつ）すきくわをふるい農耕（のうこう）に精（せい）を出し、老爺は農耕の片手間（かたてま）、近くの山に登り山菜（さんさい）をとり、生活の糧（かて）としておりました。

きょうもきょうとて、老爺はよい天気なのを幸いに、山に登り、野生（やせい）のうどを取っておりました。今まで、あまり来たことのないところで、多くのうどがあり、ふと気がついた時には、伊由谷から遠く納座（のうざ）の村をすぎ、青倉山に登っておりました。あまり遅くなると息子が心配するので、戻るうちに帰せろと、今まで取ったうどをたばね、それを背負い、やおら立ちあがろうとした時、どういはずみか足をとられ、よろけて倒れてしまいました。

そのひょうしに、自分の刈り取ったうどの木で、誤（あや）まって右の目をさしてしまいました。びっくりした老爺は、血のしたたる目を押さえ痛さをこらえて、ころぶように、息子の待つわが家へようやくのことで、たどりつきました。

これを見た息子は、驚きあわて、医者としてないころです。水で冷やすやら、近所の年寄（としよ）りの知恵をかりるやら、いろいろ手をつくしましたが、老爺は痛がってしかたがありませんでした。

手のほどこしようもなく、どうしてやることもできぬ息子は、一心（いっしん）に神仏（しんぶつ）に願うより方法がありませんでした。そのうち老爺も少し落ちつき、息子も昼の労働と一晩中の看病に疲れ、老爺の枕（まくら）もとで、うとうとしました。

その息子は評判の孝行息子であり、心のやさしい人でしたので、わずかの夢枕（ゆめまくら）に、ひとりの白衣（はくい）を着た年老（としお）いた行者（ぎょうじゃ）のような人が立ち、

「山を越えて、高い山の滝のある所の水を取って来てつけよ。」

と、言うた煙のように消えてしまいました。

はっとした息子は、あわてて老爺を見ますと幸（さいわ）いにも、うとうと眠っております。まわりもうっすらとしてきましたので、この間にと老爺のことを近くの人々にたのみ、夢のお告（つ）げをたよりに、どんとんと川をさかのぼり、滝のあるところをさがしました。

あちらの山、こちらの山とさがしまわり、疲（つか）れきって泣きたいような気持ちになった時、ふと見ると、小さな祠（ほこら）がありました。わらにでもすがる気持ちで、祠の前にたたずむと、その祠の上に滝があるではありませんか。息子は、これに違いないと大喜びで腰にさげたひょう（わらであんだ袋）に水をくみ、とぶようにして家に帰り老爺の目をその水で一心（いっしん）に洗（あら）ってやりました。

するとふしぎにも、あれほど痛かった目の痛さがうそのようにとれ、うっすらと見えるようにさえたではありませんか。息子のよろこびは、いうまでもありません。

これを伝えきた、ふきんの目の悪い人々が、ぞくぞく山に登り、美しい水で目を洗い、次々となおり、よろこんで山をおりたそうです。

これから、青倉山（あおくらさん）のお水は、目によいとされ、遠くの方よりも、礼拝者（らいはいしゃ）が来るようになりました。このことから、青倉山の氏子（うじこ）は、うどを食べなくなり、伊由谷在（いゆだにざい）も青倉さんの氏子になったということです。

